



MAM!MAM!i6

We fAvor More! Wet And Messy!!

まみれ亭

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

えー皆さんたいっへんお久しぶりです。
今回の前書きは伝統の入稿道中電車内
では無くてなんと家で書いてます。
革命ですよこれは。

主催のお家芸はさておき、このメッシー
合同誌も某感染症の影響でコミケが
開催されなかった影響で主催のモチベが
お亡くなりになられ、発行を見送ってました。
しかし今回は状況も落ち着き無事開催される
とのことと、これは動かない訳にはいかない。
ということで参加者を募集しました。
集まってみたらなんと自分含め16人。
え、すっげ……過去最大じゃん……
主催びつくりだよ……

まあ驚きはしましたが、皆さんこんな稚拙な
主催のためによく集まっていただき、そして
いい作品たくさん描いてくれました。

初参加のメンバーも増え、久しぶりの
合同誌としてはこれ以上ない盛況ぶり
となったのではないのでしょうか？

それでは、メッシー界隈のますますの発展を
願い、さらにこの本を印刷してくださった
印刷所の方々並びに手に取ってくださった
皆様方に感謝しつつ、この場を締めさせて
頂きます。

58p 56p	54p 56p	52p Dev	49p 50p	40p 47p	38p はるま	34p 36p	32p 33p	28p 31p	26p 27p	22p 25p	14p 21p	12p 13p	10p 11p	5p 8p	4p とろろ首領
オエー鳥	ぬめろん		山吹クライシス	ヤタみなみ		ぬめりによん三世	ななしかき	セントラル特快	しっとり	かこい	澱粉(あみるむ)	錫(あおがね)	ニコロ	taramin	

ん…
先生がこうゆうの
好きなのは知っている

でも
これは流石に恥ずかしい……

裸じゃないか…

ドキ♡

ドキ♡

ドキ♡

とろろ♡



WAM!WAM!!6

We fAvor More! Wet And Messy!!









WAM!WAM!!6

We fAvor More! Wet And Messy!!

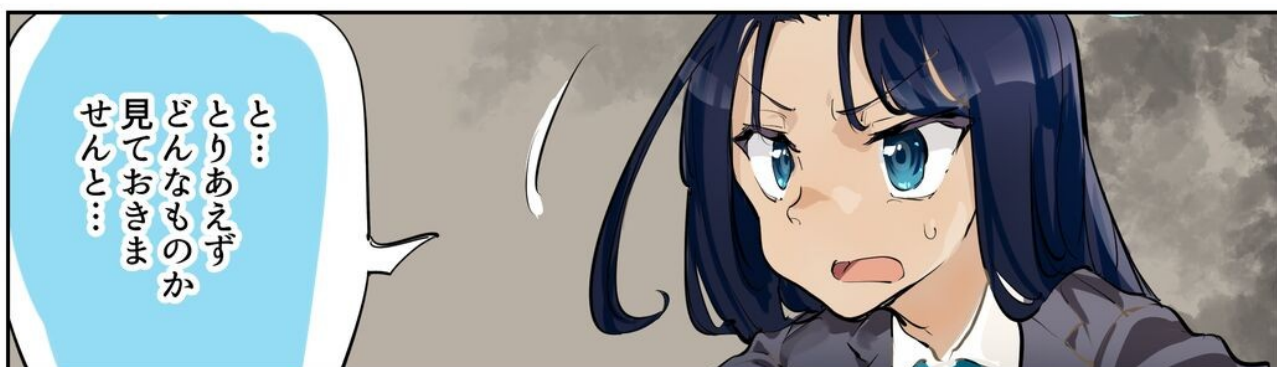


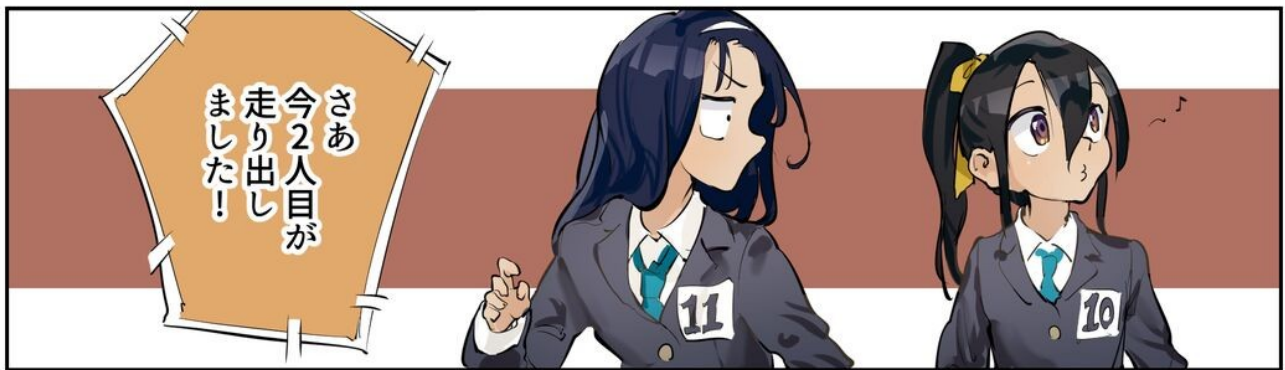






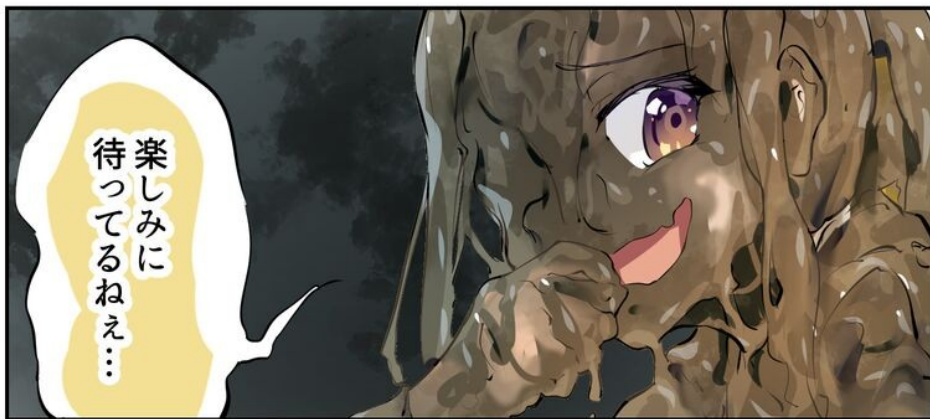


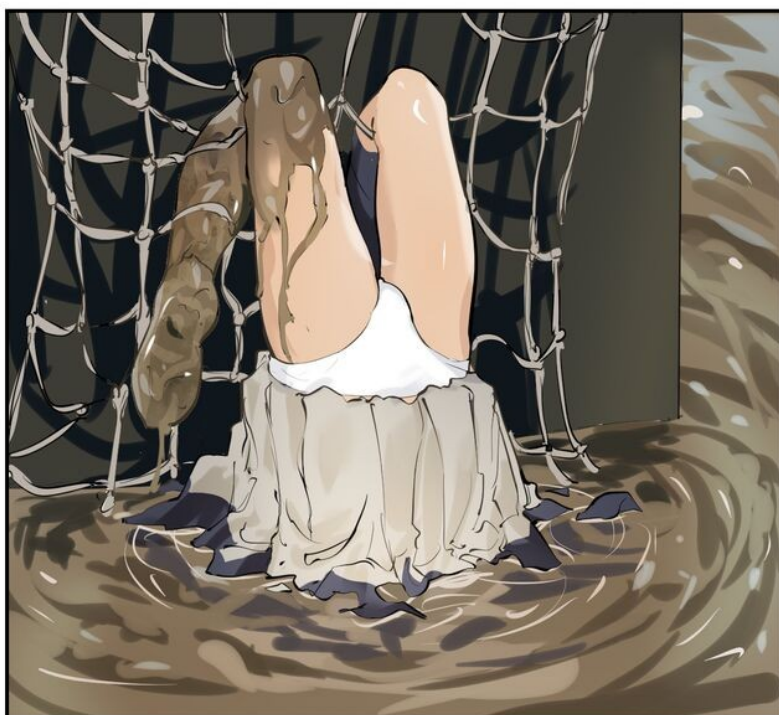














：ねえ、本当にこれが
肌にいい温泉なの？

そだよ、君が変わった美容ケア
がしたいって言うからいろいろ
調べて連れてきたんだよ

泥温泉：
なんだか怖いわね：

プルもち肌になれるんだってさ
プルフレットに書いてあった



プルもち肌…！



え？

かわっ！？
：そっか、
全身プルもち肌に
なったら凄くなる
わね！
(美容効果の話)

君かわいだから、
顔まで泥だらけになったら
凄いことになりそうだね
(見た目の話)

あのー、
僕は見学だけで
いいんだけど

せっかく美容にいいんだから
入らないと損でしょ？

僕男だから美容とか
別にいらなただけど…

いまどき男の子も
美容ケアしなくちゃ！



やだよ、

めんどくさいし
僕もう汚れたくないし

あはは

ふわあっ！
やめて！っ！
くすぐったいから
！！

ほら、一緒に
綺麗になる？

…汚された

せっかくなら服の下まで
プルもち肌にしたいわね

もう…僕は上がるよ



だーめ！
君も隈なく綺麗に
なるんだから

ああー…
もうこれ歯止めが
効かないやつだ、
連れてこなきやよ
かったなあ



…気持ちいい？

っ！
…だめだよ、こんな…！



私はっ、気持ちいいよ、
泥の感触

え、泥？
んっ、ああ

早く上がりたがってた、
のにつ、
今は大人しい、のね

っはあっ、
…うん、気持ちいい
からかな、
泥の…マッサージが

あはは、そうね、
マッサージねっ





「———これでよし、と...。」

星型の髪飾りを付けて、そう呟く。今日という日が、私はとても楽しみだった。「大人気スクールアイドルμ'sのメンバー」として、私が一人で雑誌の取材を受けることになったのだ。

「まさか、私一人で取材なんて...。」

μ'sのみんなで取材を受けたことはあるけれど、一人で取材を受けるのは初めて。楽しみな気持ちと少しの不安が入り混じって、緊張が止まらない。ドキドキしながら、黒の編み上げブーツを履く。足元をじっと見つめながら、床をブーツでトントンと叩いた。

「よし！準備できた！」

これで着替えは全て終わり。あとはスタッフさんが来るのを待つだけだ。待ってる間、私はインタビューの練習をした。どんな質問がくるか、それにどう答えるか...。それをずっとやっていると、扉をノックする音が聞こえた。

「どうぞ〜。」

「失礼します。」

ドアがガチャリと開いて、女性のスタッフさんが入ってきた。

「小泉さん、おまたせしました。インタビューの部屋に案内させていただきます。」

「はい、よろしくお願いします！」

スクッと立ち上がり、部屋から出てスタッフさんの後ろをついていく。そして、廊下を二人で歩いていく。この廊下は、前に来たので見覚えはある。いよいよ本番だとウキウキしながら歩いていた。しかし、エレベーターの前に来たところで、私はどこか違和感を覚えた。

「(あれ？エレベーターなんて通ったっけな？)」

前に一度来たときは、そのまま同じ階の部屋だった気がするし、そもそもこんなところにエレベーターなんてあったっけ...？などとも思ったが、きっと自分が来てないうちに色々が変わったんだろう...と思うことにした。

「それでは、このエレベーターに乗ってください。1階に着いたら、目

の前の部屋になります。」

エレベーターのドアが開いた時、スタッフさんが言った。

「(ええっ、その部屋までは連れて行ってくれないの?)」

どうも不審な所が多いような気がするけれど、きっとここ特有のルールがあるんだろうな...。そう思いながら、エレベーターの中に足を踏み入れた。すると、ちょうど真ん中まで来た時に、突然身体が浮いたような感覚がした。ふと足元へ目をやると、そこには信じられない光景が広がっていた。何と、エレベーターの床が大きく開いていたのだ。

「きゃああっ！」

突然起こった現象に、思わず悲鳴を上げてしまった。そしてそのまま、私はエレベーターの下へと真っ逆さまに落ちてしまった。このままだどこかへ落ちていってしまうのか、そう思ったのも束の間、脚と背中に何かがぶつかった。そしてそのまま、寝転がったような姿勢になり、下へと滑り落ちていく。全く状況が飲み込めないが、さらに混乱する事が起こった。

「んむうっ!？」

突如として、身体中に何かがまとわりついた。なんだか水のようなものだが、なんだかべとべととしている。私は素っ頓狂な悲鳴をあげ、全身に気色悪い何かを絡ませながら、勢いよく下へと滑り落ちていく。全身びしょ濡れだからか、中々勢いは止まらない。平坦な場所になってしばらくしてから、ようやく少しずつ勢いが無くなってきて、何とか止まることができた。しかし全く状況が飲み込めず、その場に寝転がりながら呆然としていた。畳みかけるように色んな事が起きて、頭の混乱が止まらない。何で全身びしょ濡れなのか、今自分がいる場所はどこなのか、インタビューはどうなってしまったのか...。全く回らない頭で必死に考えていると、突然誰かの声が聞こえた。

「記録出ました、30メートルです！」

記録？ 30メートル？ 一体何の話だろう。私に関する話だとしても、そんな記録を測られるような事をしただろうか...。さらに考えな

きやいけない事が起こったが、また別の誰かの声が聞こえてきた。
「新記録が出ましたよ、新記録！ 凄いですね！」
どうやら私に話しかけてるらしい。声のする方を向くと、そこには何とさっきのスタッフさんが立っていた。
「あの...これは一体何なんですか？」
私はスタッフさんに質問した。とにかく聞きたい事が多すぎる。
「実はですね、これドッキリなんです。『ローションスライダー選手権』という企画でして...。」
「ドッキリ...って事は、インタビューっていうのも嘘ですか？」
「そうです。」
スタッフさんはきっぱりと言い切った。折角楽しみにしていたのに、なんだか裏切られたようでしょんぼりしてしまった。それに、「ローションスライダー選手権」という事は、きっと今自分が塗れている液体は...。そう気づいた途端、急にとても恥ずかしい気持ちになってしまった。冷静になって見てみると、ブラウスもスカートもぬるぬるになり、ブーツの中もローションに満たされていた。ニーソ越しに、嫌な感触が伝わってくる。
「新記録が出ましたが、今のお気持ちを聞かせてください！」
そうスタッフさんが聞いてきた。しかし、私の答えはたった一つだ。
「———シャワーが浴びたいです...。」





有明
干潟
ここだよね...

ブッキー、
今何処デース？

ビッグサイト？











WAM!WAM!!6

We fAvor More! Wet And Messy!!

主さま…
絵の具のぬるぬるで
おかしく
なりそうです…



WAM!WAM!!6

We fAvor More! Wet And Messy!!

妖怪退治後のご褒美！

「ふう。今回の相手はそこそこ強い妖怪だったわねえ」

妖怪退治の依頼を終え、報酬をもらった博麗霊夢は鼻歌を歌いながら帰路に就く。

気持ちよく寝ていたところを叩き起こされ、状況もよく分からないまま暴れる野良妖怪の相手をさせられたのにも関わらず、霊夢はどこか上機嫌だった。

貰った報酬が多いわけでもなく、仕事の後に食べた朝ごはんがとびきり美味しかったわけでもない。

にもかかわらず、彼女は神社までの長い階段を飛ばずにスキップで登り切るくらいには機嫌が良かった。

「たっだいまーっ」

霊夢がよく通る声でそう言っても、誰の声も帰ってこない。

ローファーと靴下を脱いで裸足になり、霊夢はぺたぺたと足音を立てながら廊下を小走りで抜けてどこの部屋にも留まらず裸足のまま神社の裏から外に出た。

舗装されていない地面は霊夢の足の裏に土と砂の化粧を施したが、彼女は知らん顔でどこかへと向かう。

「さてと、今日は楽しんでじゃうわよっ♪」

霊夢が足を止めたのは、不自然なくらい大きなぬかるみの前だった。

辺りにはクワやスキといった道具と水をやるための水道があり、明らかに自然にできたものではないと分かる。

霊夢はぬかるみに入る直前まで近づき、おもむろに両手を泥の中に突っ込んでぐちゃぐちゃと土と水をかきまわし始めた。

白い手は瞬く間に真っ黒になり、跳ねた泥が真っ白な袖に染みを作る。そう、霊夢の一番の趣味は巫女服を着たままする泥遊びだ。

霊夢は筋金入りの泥んこフェチであり、時間さえあればぬかるみや泥沼で遊んで泥だらけのままその場で一日を過ごすほどだ。

だが、特に事件もない日は境内の掃除や神事などがあるため、自分が満足できるほどの泥遊びの時間が取れない。

しかし、今日のように事件を解決した日は「今日は十分な仕事をした」と自分と目付け役の八雲紫や茨木華扇に言い聞かせては一日中泥の中で遊んでいるのだ。

しかも今日の依頼は朝日が見せる頃に来て朝のうちに解決したため、遊べる時間は長い。

これが、今日の霊夢の機嫌がいい理由だった。

「妖怪退治の後はやっぱ泥んこ遊びに限るわね、気持ちいいわあ」

石けんで手を洗うときのように、手首や指の間、爪の先にも泥をまわらせて遊ぶ霊夢は小さく笑った。

「泥だんご完成っ。まっ、ひどい見た目だけど」

柔らかすぎて形を留めない泥で作った泥だんごはあっさりとぬかるみの真ん中に捨てられた。

「それえっ！」

泥だんごに続いて霊夢も、踏み固められていた地面から泥だんごの着

弾地点へと飛び込んだ。

泥に触れた紅色のスカートは泥がべつとりと付着し、上澄みの泥水がスカートを超えてドロワーズにまで染み込む。

足も泥でコーティングされており、土で薄汚れていたさつきまでの姿が綺麗に見えるくらいのドロドロっぷりであった。

「チマチマと手で泥だんごなんか作っても面白くないもの。泥んこ遊びは全身でやらなきゃねっ!」

そう言うとき霊夢は座ったまま前屈の姿勢になり、袖を着けたままの両腕を泥の下に埋めた。

そのままゆっくりと体を曲げ、平伏するような体勢で肩まで浸からせる。指で袖を泥の中に手繰り寄せ、完全に埋まったことを確認すると霊夢は力を入れて引き抜いた。

「んっ、しょっと」

地上に出てきた腕は収穫したてのレンコンのようなビジュアルをしており、滴る泥と泥水が巫女服のまだ綺麗な部分に新しい染みを作り、トレードマークの袖は泥にまみれて今にも滑り落ちそうになっていた。

もう一つのトレードマークであるリボン、艶のある髪の毛、まだ被害の少ない顔と巫女服の上……。

これからどう汚していこうか考えていると、どこから霊夢のことを呼ぶ声がした。

「霊夢ーっ!」

「あら魔理沙……きゃーっ!」

霊夢が声の方を振り向くと、魔理沙がとんでもない速さで突っ込んできているのか見えた。

魔理沙は霊夢に抱きつくと、その勢いそのまま泥の中を転がっていった。「お前が最近お騒がせの妖怪を退治したって聞いて飛んできたぜ。ドロコン遊びをするなら呼んでくれよな」

「だって久々の泥んこ遊びの機会なんだから。寄り道せずに帰りたいに決まってるじゃない」

「そりゃそうか」

不意打ちを食らった霊夢も、泥の中を転がって白黒の服を泥まみれにしてしまった魔理沙もまるで何もなかったかのように話し始めた。

今、霊夢の目の前にいる魔理沙も霊夢に負けないくらいの大の泥んこ遊び好きだ。

二人で力を合わせて事件を解決した日や、霊夢が何かを解決したと聞いたときはいつも二人で幻想郷各地のぬかるみや湿地、泥沼を巡っては泥人形になって帰ってくるというのを繰り返している。

「それより泥んこの中は土足厳禁よ」

「ああ、スマンスマン」

霊夢は魔理沙の履いているサンダルを指差し、脱ぐように促す。

魔理沙は素直にサンダルを脱いで裸足になり、霊夢は行儀よくサンダルを揃えている魔理沙の頭上から桶で掬った泥をぶちまけた。

「はい、ルールを守れない子にはオシオキよ」

「相変わらず厳しいぜ」

博麗神社のぬかるみに土足で入ったら罰として泥まみれにされるルールがあり、魔理沙はこのルールを守ったことはない。

「ああ、そう言えばこれからアリスが来るぜ」

「へえ、意外ね。まさか洗濯係として呼んだんじゃないでしょうね」

「まさかそんな訳ないぜ。それより、バケツもう一個ないか？」

霊夢と魔理沙は両手に泥の塊を持ち、向き合って今にも相手の顔面にぶつけてやろうとした瞬間、魔理沙が思い出したかのように話し始めた。

「あるけど……まさかアリスも遊ぶの？」

「ああ。少し前に色々あってな、アイツは見かけによらずとんでもないお転婆さんだったぜ」

「てつきり泥んこ遊びはおろか水遊びでちよつと濡れるのすら嫌がりそうなイメージだけど」

「まあ、見てなつて」

二人はアリスがまだ視界内にいないことを確認すると、緩い泥が山盛りになった桶を用意し、泥を洗い流してしまうホースや盾にされる可能性のある道具をアリスが来ると思われる方向とは逆の方に集めた。

博麗神社の泥で遊んだことのないアリスは間違はなく土足で入ってくる。そう考えた二人はアリスに最高のお出迎えをしてやろうとしていた。

そして待つこと数分、青く澄んだ博麗神社の空に人影が現れた。

「おつ、ついにお出ましか。この時間に空を飛んで来るやつはアリスしかないな」

「んー？ 何か二人いるようだけど……」

霊夢の言う通り、向かってくる人影は二つあった。

並んで飛んでいることから全くの無関係という訳ではなさそうだ。

そして二人の少女がぬかるみの前に到着した。

「霊夢さんっ、こんにちは」

「もう魔理沙っ、置いていかないでよー！」

二人のうち一人は魔理沙の言う通り、アリス・マーガトロイドであった。置いていかれたことが不満なのか、少し頬を膨らましている。

もう一人は守矢神社の風祝である東風谷早苗だ。ふくれっ面のアリスに対し、こちらはニコニコと笑っている。

「あら、早苗じゃない。今日はお休み？」

「わりいわりい、霊夢と遊べんのが久々すぎて嬉しくてさ」

霊夢と魔理沙はアリスに計画が悟られないよう、精一杯いつも通りの様子を装った。

「まったくもう……。あの、霊夢？ ちょっと意外かもしれないのだけれど……」

「あーあー、そこらへんは全部魔理沙から聞いたから大丈夫よ。早苗も今日は好きに遊んでいつてちょうだい」

「いやあ、アリスさんが珍しく博麗神社に行こうとしてたんでついていったんですが、これは僥倖ですねー！」

「何が僥倖よ……開口一番に「今日はドロコン遊びですか？ ご一緒したいですっ」って聞いてきたくせに……。じゃあ、さっそく失礼して……」

アリスは躊躇することなくぬかるみの中に足を踏み入れた。

レースサンダルを履いたまま。

霊夢も、魔理沙も、そして早苗もそれをすぐに指摘せず、逃げ場のない中央に来るまで待った。

「ふーん、この泥は少し柔らかいのね。森のと比べると……」

「ちよつとアリス、何してるのよ」

「ちゃんとルールは守らなきゃだめだぜ？」

「……えっ」

アリスが手で泥の感触を確かめた次の瞬間、桶から放たれた大量の泥がアリスを襲った。

「きゃあつ。ちよつとつ、急はやめてよ！」

「だってアリスがルールを守らないのが悪いんだぜ？」

「何よルールって！ 知らないわよ！」

「アリス、アリス。博麗神社の泥んこは土足厳禁よ」

「土足厳禁って……もうすでに裸足の貴女たちもドロドロで土足みたいなものじゃない！」

「分かった分かった。とりあえず、次からは気を付けてくれよな？」

「も……泥だらけじゃない」

理不尽な目にあいながらも、アリスはどこか楽しそうだった。

今の一瞬で先客の二人並みに汚されたアリスは、サンダルを脱いで裸足になる。

「いやあ、やっぱりこれはひどいルールですよねえ、アリスさん」

「その言いぶりだと最初から知ってて黙っていたみたいじゃない」

「ええ、知っていましたよ。でも、アリスさんに先に伝えるよりもアリスさんにドロロンコの刑を受けてもらった方が面白いかなって」

早苗は屈託のない笑顔でそう言った。

「じゃあ、私も失礼しますね」

早苗はそう言ってスニーカーを履いたままぬかるみの中に飛び込んだ。

「おっと？ やっちゃったなあ、早苗」

「あら、自分の言ったことをもう忘れちゃったのかしら？」

「今更戻っても遅いわよっ！」

「やっちゃったあ、ドロロンコにされちゃうっ」

次の瞬間、三人の攻撃による巨大な泥しぶきが上がり、早苗も泥まみれにされた。

「えへへへえ、さつそくドロドロですね。さつきまでピカピカだったんですよ？」

「そうなるって分かって来たくせに」

真つ赤なキャンバス生地と真つ白な靴紐を泥染みで台無しにされたスニーカーを脱ぎながら早苗は笑みを浮かべた。

霊夢は自分の巫女服と色が似た泥まみれのスニーカーを見て、この後自分もあのスニーカーと同じ風になることを想像していた。

霊夢がそんなことを考えているうちに、いつの間にか背後には泥入りの桶を持った三人が待機していた。

「それはそうと、霊夢だけドロロンコをぶっかけられないのはちよつと納得いかないぜ」

「しかも、ドロロンコになりたいって感じの顔をしていましたしね」

「私も二人と同意見よ。その紅白の巫女服、元の色が思い出せないくらい泥んこ一色に染めてあげるわ！」

「上等よ、かかってきなさいっ」

霊夢は白い歯を見せてニカッと笑い、その体で流しこまれる泥を全て受け止めた。

「あははあ、私ん家の泥んこなのにひどおい♪」

「ドロロンコは平等ですよつ、霊夢さん」

霊夢への攻撃は魔理沙、アリス、早苗の順番で行われ、早苗はいやらしく服の中に入るように泥を注ぎ込んでいる。

「平等って言うんなら魔理沙は私からしかやられてないし、アリスも早苗にやられてないわよ」

「へえ……」

それを聞いた早苗は目を光らせた。

最初の標的はアリスだ。

桶に泥をたっぷり詰めたものを用意した早苗の前に、アリスは膝を曲げて座ってこれから起こることを受け入れた。

準備万端のアリスを見て早苗はどうするか少し迷い、最終的には泥を背中へ流し込むことを選んだ。

アリスは泥独特のくすぐったさに身をよじらせ、泥を流し終わった後はぬかるみの底に背中をこすりつけた。

「もう、めちゃくちゃね。とりあえず、ここを出るまでは何をしても泥んこになるし、綺麗になんてなれないことは分かったわ」

今の時間だけで服の表も裏も泥まみれにされたアリスはクスクスと笑った。

「さて、二人が私をどんな目に合わせてくれるか見ものだな」

アリスと早苗のやり取りを見ていた魔理沙は仁王立ちでそう言い、何でも来いといった感じで二人の注意を自分に向けた。

アリスと早苗はそれぞれのプランを耳打ちし合い、小さくうなずいて桶に泥を詰め込んだ。

「良いわねえ、良いわねえ」

「おいおい、エッチなショーを見ている富豪みたいになってるぜ」

「早苗ー、アリスー、魔理沙がエッチなことをされたいって言ってるわ」

「言ってるないぜー」

魔理沙の否定は二人には届かず、霊夢の方に向けて親指を上げたサインを出した。

「行きますよ魔理沙さんっ」

「ほらほら、こうされるの好きでしょ？」

早苗は魔理沙の服の襟から、アリスはスカートと下着の下に隠されたお尻の部分に泥を流し込んだ。

「あははっ、この変態どもめっ」

「こらっ、まだ終わってないから逃げないの」

「もっともーっとドロコにしてあげますからねえ」

魔理沙も大きく身をよじらせるが、まだ泥を流し切っていない二人に拘束されていて変な動きになっている。

「……我慢できないっ、私も混ぜなさい！」

その光景を見ていただけの霊夢も魔理沙の服の中に泥を入れ始め、裾から溢れ出る泥の量は魔理沙の足元を埋めるまでになった。

「それはないぜ霊夢っ、この後しっかりお返しのだロコだからな！」

「霊夢さんをドロコにするなら私もお供します！ 今度は今みたいにドロワーズの中をぐちゅぐちゅにさせてやりますっ」

「二人がやるなら私もやるわよっ。いくら泥んこでお返しされてももう気にしないんだからっ」

「魔理沙はともかくアリスと早苗はずるいわよっ！ それでもやるって言ならおんなじ目に合わせてやるんだから！」

魔理沙を存分に泥まみれにした後はやり取り通り霊夢が三人の魔の手によって服の中から外まで泥まみれにされた。

その次はアリスが服と下着がパンパンになるまで泥を詰め込まれ、そ

の次は早苗が逆立ちした状態で泥を上から流し込まれ、その次は一周戻って魔理沙が……といった風に三対一での汚し合いは行われた。

やり合いの最初の原因となっていた土足での踏入のことなどは誰も覚えておらず、全員が「相手を泥まみれにすると、自分も泥まみれにしてもらえる」という考えを持ってしまったせいで、泥まみれにするのも、泥まみれされるのも大好きな泥んこフェチの四人は正午の鐘が鳴るまで泥のかけあいを続けた。

「もうお昼の時間ですね。楽しい時間がすぎるのは早い……!」

「お昼の時点でこんなにドロコンまみれになっちゃうなんてね」

「四人もいたら当然じゃないかしら。もう何杯分もの泥んこを浴びたか分からないわ」

「ドロコンまみれすぎて困ることなんてないんだからいいじゃないか」

泥水を吸い、泥がべったりとまとわりついた服を着たまま動くのが相体力を使うのか、四人はだらしなくぬかるみの中で寝そべってだらだらと話をしていた。

「そんなことより、午後どうするか決めようぜ。私は別に何でもいいぜ」

「何をするって、泥んこ遊びじゃないの？」

「それはもちろんだけどさ、せつかくだしちよつと変わった遊びとかしてみたいだろ？」

「まあ、一理あるわね。となると、どんなのがいいのかしら……」
べちよつ。

アリスがプランを考えていると、顔面に泥だんごが押し付けられた。

「そんな難しく考えなくていいんじゃないの？ 今だってこうやってアリスに泥んこを擦り付けたけど面白かったし」

見上げると、犯人の霊夢が余裕のある笑みを浮かべて立っていた。

「確かに面白いわね。でも、一方的にやられるのは趣味じゃないのよ!」
ぐちゃつ。

アリスは顔を拭って手に溜まった泥を霊夢の顔にお返しとばかりにぶつける。

「楽しそうですね! 私も混ぜてください!」

睨み合う二人に、早苗から泥だんごの横やりが入る。

「ほらほら、よそ見なんかしている場合じゃないぜつ」

霊夢とアリスが早苗の方を向くと、今度は死角から魔理沙が現れて首筋に泥を塗りたくる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………午後の予定は、決定ね」

全員が泥を両手に持って臨戦態勢をとり、霊夢が静かに沈黙を破った。
「今日は、日が暮れるまで泥んこ合戦よ! 能力でも何でも使って全員泥んこまみれにしちゃいましょ!」

霊夢はハキハキとした声で宣言し、三人は大きな声で同意した。

「飛んできたの全部当たっちゃいましたあ、きたなあい♪」

「転ばされるし、全員からぶつけられるしで散々だぜ♪」

「ひゃんつ、そんな近くからじゃ避けられないじゃない♪」

「頭を狙われすぎて髪の毛がボサボサになっちゃったわ♪」

始まった泥んこ合戦は壮絶なものだった。

普段は色とりどりの服を纏って空を舞い、鮮やかで綺麗な模様の弾幕を放ち、それを華麗に避けあっている彼女たち。

それが今は泥色一色の服を着てぬかるんだ地面を転げまわり、不格好な泥の塊をむやみやたらに投げ合い、それを避けずに当たりまくっている。手にした泥の塊を投げ飛ばしては、接近したら肉弾戦のように泥を相手の体に叩きこむその様子には戦略も何もない。

「もう、袖が邪魔くさいっただけありやしないわね。脱いじゃえっ」

「私も脱いじゃいます。ばいばーいっ」

「私も帽子が重いし取っちゃうぜ」

「じゃあ私はケープを……そんなに邪魔じゃないけど」

白熱する汚し合いについていくためなら、お洒落はいらない。

少女たちは身に着けていたものを泥の中に捨て、少しでも身軽になろうとした。

長時間の泥遊びで完全にリミットが外れ、頭の中が泥のことではいっばいになった彼女たちはついにそれぞれの能力を泥まみれになるために存分に発揮しはじめた。

「それじゃあ行きますよっ、泥符「ドロコンレイン」っ！」

一番手の早苗がスペルを宣言すると、ぬかるみの泥が雲のように四人の上空に集まった。

霊夢たちに付着していた泥も持っていかれ、かろうじて服の色が分かるくらいには綺麗になった。

そして早苗が指を鳴らすと、四人を対象とした局所的な泥の豪雨が降り始めた。

「あはははっ、また巫女服が泥んこ色に染まっちゃったわ！」

「こんなのに降られたら着替えがいくつあっても足りないぜ！」

「全身ドロドロの台無しになるには最高の天候ねっ！」

「皆さん皆さんっ！ 足元のベチャベチャのドロコンたまりに寝転がればもっと汚くなれますよ！」

上から泥の雨、下にはぬかるみ。

こんな環境であちこち跳ねまわったり、地面を滑ったりと暴れまわった四人の体からも泥の雨が滴っていた。

「次は私よっ、泥符「ドロコンレギオン」っ！」

二番手のアリスは脱ぎ散らかされた装飾品と靴に魔法をかけてからスペルを宣言した。

泥を纏わせた装飾品たちは人形の形に変形し、四人に襲い掛かった。

「こんなに擦りつけられたら本当に二度とこの巫女服着れなくなっちゃうじゃないっ！」

「こらこらっ、お前みたいな泥人形に懷かれたら一生綺麗なままでいられないぜっ！」

「くすぐったいっ！ 気持ちわるういっ！ でも、楽しいっ！」

「主人でも手加減不要って命令したけど、これはやりすぎよおっ！」

霊夢は人形たちによってぬかるみの上をあっちこっちひきずり回され、魔理沙は自分の大きな帽子から生まれた泥人形に全身をまさぐられ、早苗

は押し倒されて脇や足の裏をくすぐられた。

発動主のアリスは三人がやられていることを同時にやられ、スペルが切れる頃には四人の中で一番ひどい姿をしていた。

「次は私だな。泥符「ドロコンコエコロジカルボム」っ！」

魔理沙はどこから取り出した楕円形の何かを取り出し、アリスにパスした。

「最後に持っていた人がすごい目に遭うぜ！ さあ、ゲームスタートだっ」
水属性を表す青色と土属性を表す紫色に輝く爆弾が四人の手元を渡っていく。

組み合わされた属性と込められた魔力の量の多さから、全員が何かを察していた。

少したった後、膨れ上がった爆弾は霊夢の手元で爆発し、案の定めか
るみ全体を巻き込むほど大規模な泥の爆風が四人に直撃した。

「何よこの泥の量はっ、重すぎて動けないじゃない！」

「最後に持つてなくてもこんな目に合うなんてとんでもないゲームね！」

「結局こうなるんじゃないですか、魔理沙さんったら前も似たミスをして
いましたよねっ」

「わりいわりい、魔力の調整ミスっちまったぜ」

三人は魔理沙に文句を言うが、その表情は凄く喜んでいた。

泥んこ好きの彼女たちは、心の中では魔理沙にもっとひどい失敗をし
てもらい、もっとすごい目に遭わせてほしいと思っている。

そして次回も魔理沙は期待に応えて何かを失敗して、ゲームの参加者

を全員巻き込むのだ。

「最後は私ね！ 泥符「ドロコンコ結界」っ！」

トリを担当する霊夢は泥に潜らせた札で陣を組み、ぬかるみ全体を結
界で囲った。

この空間が初めてのアリスは何が起きたか困惑していたが、魔理沙の
手のひらからあふれ出す泥のシャワーを浴びさせられて、この空間の特性
を理解した。

泥符「ドロコンコ結界」の効果は中にいる人に泥を自在に操る能力を付
与するものだ。

こんな能力を得てしまった彼女らが大人しくしている訳もなく、大き
な泥しぶきと泥色の放物線がひっきりなしに空中を舞い続けていた。

「三人ともドロンドロンのグツチャグチャで誰が誰か分からないぜっ！」

「時間が切れるまで遊んで汚してまみれてやるんだからっ！」

「全身デロデロのベチャベチャなのが気持ち良すぎて癖になっちゃうっ！」

「やりすぎなくらい楽しんでるわねっ！ これは私も負けられないわ！」

霊夢も魔理沙もアリスも早苗も結界が持続する短い時間を存分に堪能
してやろうと、ヘトヘトになるまで遊び続けた。

結界の空間保持期間が切れて四人が普通の世界に戻ると、そこにいた
のは幻想郷の頼れる少女たちではなく、大きな声で笑う四つのやんちゃな
泥人形たちであった。



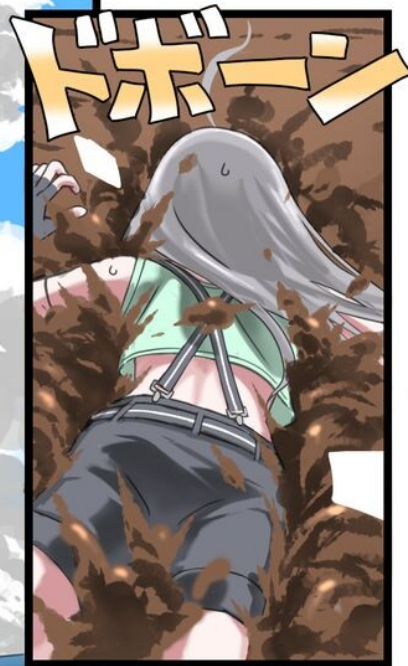
WAM!WAM!!6

We fAvor More! Wet And Messy!!





ビロロ





WAM!WAM!!6

We fAvor More! Wet And Messy!!

あああ！
あなたは
変質します！



WAM!WAM!!6

We fAvor More! Wet And Messy!!



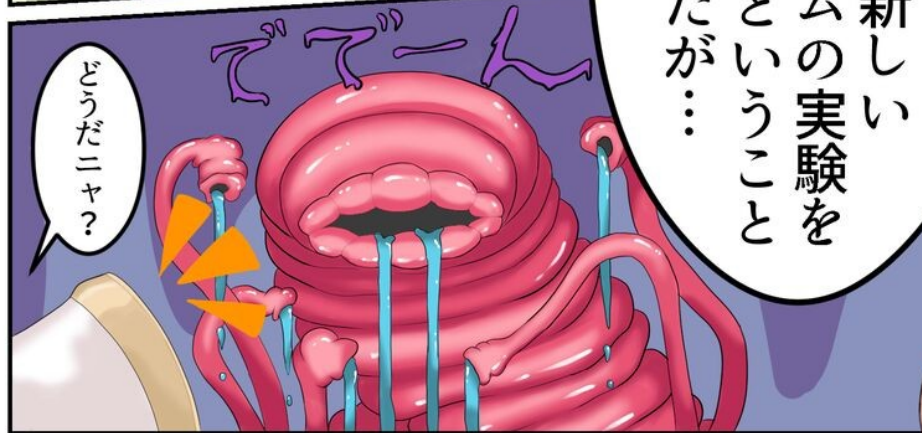
む…
来たかニヤ…？



明石様…？



ふっふっふー、
今回は自信作ニヤ♪



どうだニヤ？

あの…本日は新しい
サポートアイテムの実験を
手伝ってほしいということ
でございましたが…



効果は
修理はもちろん
疲労回復
肩こり
血行促進
保湿効果
冷え性
ストレス解消
不眠症
神経痛
etc…

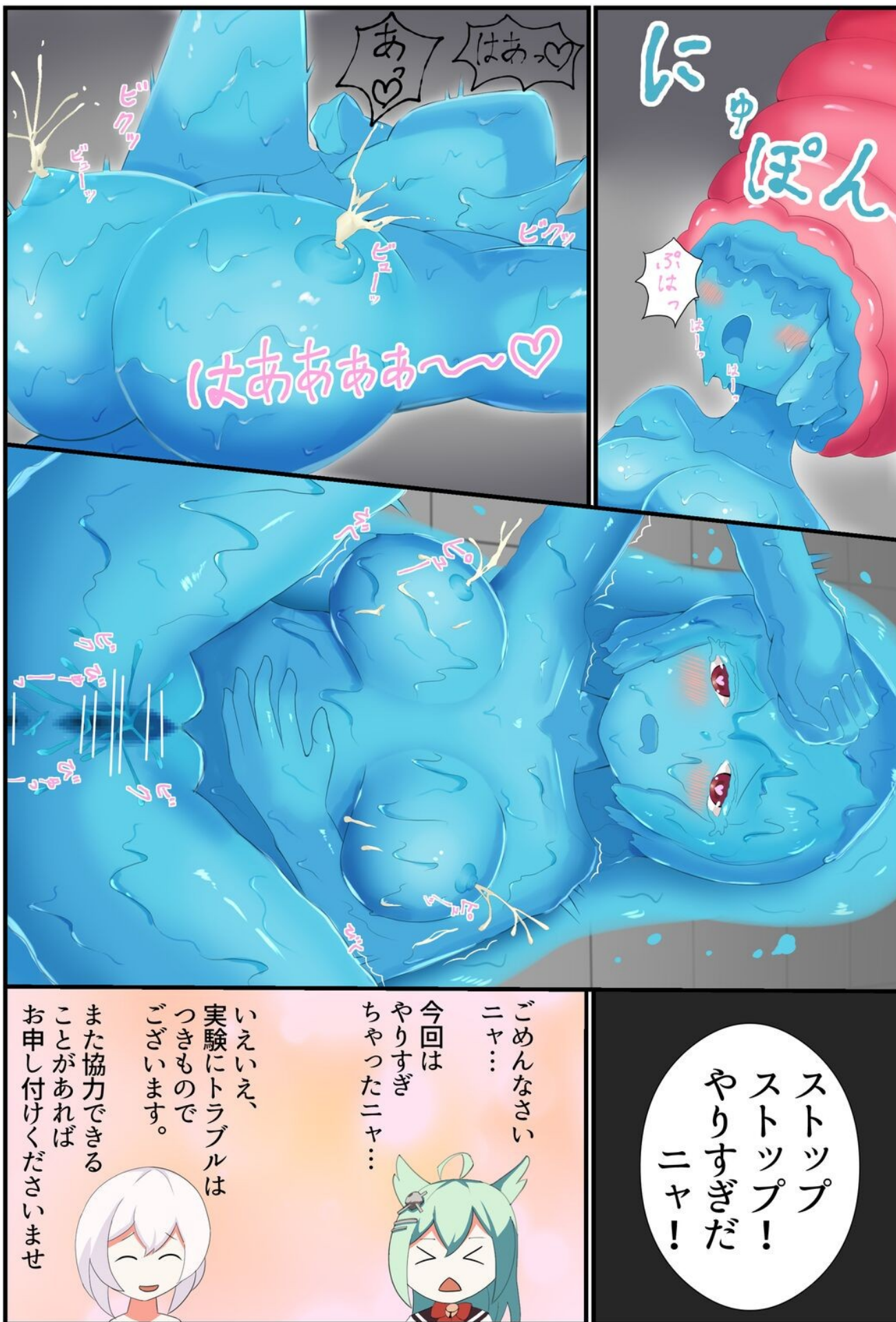


ま、とにかく試してみるニヤ！

あの…
あの生物は
一体…？









WAM!WAM!!6

We fAvor More! Wet And Messy!!

盗賊娘と魔女の森

―鳥

オエ

森の光景。しかし魔女が手を加えたそこは、罠だらけの危険地帯だ。いたるところに魔術が仕掛けられており、仮に一つでも踏み抜けばろくでもない状態異常が襲い掛かる。恐ろしい場所だ。

あたしは盗賊だ。

正確には、遺跡荒らしを職業とした、ソロ冒険者。主にダンジョンの宝を掻っ攫ったり、他の冒険者が戦つてるところをスリしたり、漁夫の利で宝を奪つたり

...まあそんな感じ。

冒険者の中じゃ、ちょっとだけ有名なワルイ奴。それがあたし、盗賊のジュノだ。

今回狙うのは、ある村の横にある森。その森は魔女がアトリエを建てて、森全体を縄張りになっている。あたしはそのアトリエに潜り、魔女の秘宝や、高値で売れそうな魔導書や希少素材を盗みに行くのだ。

「ふう...」

傍から見れば、どこにでもありそうな

「ふう...」

みがあたしを迎えた。

すぐに辺りを見渡し、これ以外に迂回を這い出してくる。

できそうな場所を探す。そしてあたしは悩んだ。魔術的な罠が、ヘドロのぬかみを囲うように設置されていたのだ。まるで、「そこを通ってね♡」と言わんばかりに。

分かりやすい罠。けど、あたしにはこ

ういうのは慣れっこだ。小さく呟くように詠唱し、『浮遊』の魔術を使う。

「ざーんねん♪」

無理やりにでも、ここを渡らせようと

する物理的な罠だったのだろう。だが、

あたしには無駄だ。足がちよつと浮いたのを感じると、そのまま空中を歩こうと一歩踏み出した。

――瞬間、ぬかるみから突如生えてきた分切り込みは簡単に入った。

腕が、あたしの右足を掴んだ。

「ッ!?」

魔物の魔力の反応はなかったのに!

浮遊が発動しているお陰で沈むことはなかったものの、あたしの右足を掴んだ腕は、ゆっくりとぬかるみの表面から体

ぬかるみと同じ茶色で、ソレはドロリと全身が溶けていた。汚らしい音を立てて出てきたのは、肥満体型の醜悪な男の姿をしたヘドロの塊。顔はのっぺらぼうで、全体的にぬらりとテカっているのが、なんとも気持ち悪い。

泥人形、否、ヘドロゴーレムと呼ぶべきか。ソイツは分厚い手であたしの右足を掴んだまま、四つん這いの状態で全身を這い出した。

「このっ!」

あたしはすぐさま、ヘドロゴーレムの頭部をナイフで切り裂く。ヘドロの塊なだけあって、手ごたえは薄い。だがその

不定形相手に、物理攻撃が効かないのはご法度だ。だが、あたしのナイフは特別製で、不定形相手でも戦えるように再生を阻害するエンチャントが込められている。

つかさずあたしの右足を掴む手を切り

裂こうとした時、急にあたしの身体がぐへドロゴーレムはキスしながらあたしの口内に濃厚なへドロをぶちまけてきた。

「っ、あ...え？」

いきなり全身が重たくなり、力が入らなくなる。ナイフが手からこぼれ落ち、立つこともままならずその場にぺたんと座ってしまう。

一体何が。突然のことに思考が追いつかないあたしに、へドロゴーレムはチャンスだと言わんばかりに上半身を起こしてきた。

「ひっ!？」

泥人形はあたしを押し倒すように覆いかぶさって、顔を近づける。のっぺりと丸みを帯びた顔の下あたり、口にあたる部分がぐばあと開くと、奴はあたしの唇を奪った。

「んぐっ、んぶ!？ぐぶつぶづうっ!」

あたしの初めてのキスを、へドロゴーレムに奪われてしまう。しかも恋人らしいキスではなく、貪り、食い散らかすような乱暴なもの。さらに最悪なことに、

舌を巻きつけられ、まずいとも苦いとも言える、とにかくえぐみの強いへドロを強制的に味わされ、食道に流される。息をすることもできず、ただただ気持ち悪いデープキスに、あたしは悶絶することしかできなかった。

数分、数十分経っただろうか。案外もつと短かったかもしれないが、それほど長く感じられたキスが止まる。口元からずるりと舌が抜かれたのを感じた瞬間、あたしは盛大に吐き出した。

「んんんうっ!んぶぐ...ぶえ...えっ!ぶへえ...っ!げぼっ、お...ええ...っ!」

ねっとりと喉に絡みつくへドロに悶え、強引に全部吐き出そうとする。ねばっこくて中途半端に食道に残っている感覚に、あたしは涙を浮かべて何度も嘔吐する。

しかし、突如あたしの身体がドクン!と跳ね上がった。

「う、あえっ？」

心臓が突如高鳴り、身体が火照り始める。ジクジクと全身が痒くなり始めて、あたしはか細く呼吸を繰り返し始めた。

一体なんの罠だったのだろう。熱く苦しみ始めたあたしは、こうなった元凶のヘドロゴーレムを睨んだ二つもりだった。

(？)

ヘドロゴーレムが視界に入った途端、もう一度ドクン！と身体が跳ね上がった。

火照りが強まり、顔が赤く染まっているのが感覚だけでもわかる。

嘘だと思いたかった。だが、心はもう誤魔化せない。

(い、いや…なんで、こんなキモいのに…！)

一体何が起きたのかわからない。だが、あたしはヘドロゴーレムに惚れてしまった。

二ぬかるみに入った時点で、あたしは

詰んでいたのだろう。ぬかるみを囲う罠は、踏まれて発動するものではなく、侵入者を検知して『眩暈』の魔術を与えてくる。さらにディープキスをされた時に、ヘドロゴーレムがあたしの体内に森の罠と同じ術式を刻まれたのだ。『恍惚』と『淫愛』の魔術。

ほんの僅かな油断。そして、刻み込まれたヘドロの味に混じった、二つの魔術。あたしはまんまと術中に嵌ったのだ。

「きつ、きてっ…ちがつ！あ…っ♡」

「来ないで」と言おうとしたはずが、彼を求めてしまう。あたしの声にヘドロゴーレムは応えたのか、背中にブヨブヨの腕を回し抱きしめる。

さながら恋人同士のハグをされた途端、なんとも言えない幸福と安堵感に包まれてしまう。

「ひっ♡いつ、いやああ…っ♡まって、やめ…んあっ♡」

ぬちゅう、とゼリーみたいな感触に身

体のほとんどが包まれて、ソーセージの

…！

ように太い指が服の中に滑り込んでくる。ぐちゅりと音がし、服がバターみたいに溶けてヘドロに変わってゆく。服が腐ってヘドロ化しているのだ。そうして晒される肌に、ねっとりとしたヘドロが肌に纏わりついてくる。

気づけばあたしも腕を回して、ヘドロゴーレムにしがみつくように身体を密着させていた。火照った身体を鎮めて欲しいと言わんばかりに、身体を擦り付けて求めてしまう。もがけなくなるくらいに、底なし沼に沈んでいくように。

くすぐったくて、気持ちがいい。生温

「んはあっ♡はあ、はあっ♡」

かいが火照った肌に塗りこまれるヘドロの温度はちょうど良く、低音マッサージュを受けているかのような気分になる。背中から胸にかけて、肌を舐め上げるヘドロの手に、あたしは喘ぎ声を漏らした。

ヘドロで塗られてない箇所は、残るは首から上だけ。あえて残したのだろう、ヘドロゴーレムは鼻先まで顔を近づけ、あたしの表情に注視しているように見えた。

（やつ、やだ！やだやだやだ！こんな奴なんかに！♡こんなキモいので感じちゃうなんてえっ！♡）

これ以上は駄目だ。これ以上、こんな

服がヘドロに変わって、下半身にもねっとりとしたヘドロが包み込んでくる。その間にも肩や腕といった部位も茶色に染められ、身体の大半がぬらりとした脂ぎった色に変わってゆく。

奴に身体を捧げてしまったら。犬のように息を荒くして、彼からいっぱい愛を受けたいと思っているあたしの中で、理性が「逃げなければ」と囁く。けどどうやって？もういっぱいドロドロになつてのに。こうして肌身を合わせて気持ちよくなりしたい。

気持ち悪い。こんな奴と同じになるなんて、すっごく幸せ♡違う！あたしは

すっかりヘドロゴーレムに心を許した本能が、あたしを墮落させようとしてく

る。だけど嫌だ。絶対にあきらめない。なんとかして脱出だけでも。

そう考えていたあたしは、ヘドロゴー

レムには無防備な姿に見えたのだろう。「う...んあ...♡♡」

ヘドロゴーレムは腰をほんの少し引くと、ドチュンッ！とあたしの下腹部に何かを突き刺した。

「ひゅーっっ！...♡♡♡♡」

服も下着も溶けて、守るものがなくな

った秘部。そこに、ヘドロゴーレムの性器が挿入されたのだ。ぐにゅぐにゅと柔だったであろう箇所へと唇を捧げた。それからくも、肉壁をこじ開け奥まで突き刺の瞬間、あたしは彼に――押し倒された。さる極太の感触。

「んふっ♡んぶっじゅる...♡♡ぐぶっ
ファーストキスさえも初めてだったの
ぷ、ぶぶづうっ♡♡♡ふう、う、っ

だ。そこを許したのも、彼が初めてだっ♡♡」

た。だが、そんなこともどうでもよくなるほどに、あたしの身体に襲い掛かったもドロドロに変えられてゆく。

快感はすさまじいものだった。

たった一発。奥まで挿れられただけ

で、あたしはイってしまふ。弓ぞりにな
く。キスしながらあたしはヘドロに包ま
って腰が引いてしまい、脳がパチパチと
れ、取り込まれた。

弾けてそのまま飛んでいってしまいそう
になる。視界も同じように弾けて、ぐら
口の中に入り込むヘドロも、全身を覆

い分厚く塗りこまれるヘドロも、ナカにでいるようだ。あたしは気合を入れて身ぶち込まれたヘドロも、全部全部受け止体を起こして、突如襲い掛かった気持ちめて、あたしは幸せに包まれてゆく。悪さに嘔吐した。

(きもちいい♡♡ドロドロきもちいい「うぐえ、ええっ！ごぶお、え、え
っ♡♡♡」

もはや魔女の森も、宝もどうでもよく「ぎやああっ？いきなり吐かないでなつて——あたしはひたすら、ヘドロゴーよ！」
レムと交わった。

「お、お、え…ごっ、ごめ…ん」

口からゼリーのような吐瀉物を盛大に吐き出してしまった。それに、女の子が飛びのいて文句を言ってきた。まあ、当然の反応だと思う。

「…い…お…？」

いつ、気を失ったのだろうか。

倒れた記憶がないが、あたしはいつの間にか横たわっていた。全身鎧を着たかのように身体が重く、指の一本さえも動かす気力がない。

僅かに開く目蓋を開けて、首を動かさずに辺りを確認する。どうやら森の中、らしいが。

「おー…お？…おーい」

「…う、う」

それに、女の子？らしい、誰かが呼ん

「あ、あたし…なんで、ここに」
「…君、ここで倒れてたんだよ。わたしはちようど通りかかってねえ」
パチパチと何度か目蓋を開けて、呼びかけてくれていた女の子を見る。簡素な

衣装に身を包んだ灰色髪の少女だ。冒険「お幸せに♡」

者でもなさそうな少女が、なぜ魔女の森
にこんな？
灰色髪の少女が、魔女が目の前から去
ってゆく。彼女へ向けて伸ばした手は、
ヘドロの手に掴まれ、握られた。

――魔女？

「君さ、わたしのアトリエ目指して来た
んでしょ。残念だったねえ」
その後のことは、語るまでもないだろ
う。遺跡荒らしのジュノは消え、代わり
に魔女の森に新たな住民が増えた。

そしてようやく思い出した。あたしは

――あのヘドロゴーレムに捕まって…全
てを思い出してしまった。

了

吐瀉物を見ればギトギトの茶色で、腕
も足も、同じ色に染まっていた。まるで
女の体をしたヘドロゴーレム…否、その
ものになってしまっていた。

「ま、あのヘドロゴーレムをえらく気
に入ってくれたみたいだからさあ♪特別に
プレゼントしてあげる」

ヘドロゴーレムに捕まって、ヘドロゴ
ーレムに初めてのキスを奪われて、彼に
処女を奪われて、彼に取り込まれて…全
部を思い出した時、あたしの背後からぶ
ちゅぶじゅっ！と汚らしい音が響いた。

「あ…ま、まって…」



おから首領
PixivID:674131
twitter:@DON_tororo

えー皆さんいかがだったでしょう？

たぶん一年半ぶりのメッシー合同になるのですが、その間僕にもいろいろありました。まずメッシーで活動しているこのアカが「とろろ首領」から「おから首領」になりました。元表アカがVtuber活動用になったからです。

今は一応こっちが本垢です。今回のコミケでまあそれなりにモチベ爆上がりしたので、年単位でサボってたこっちの活動もそろそろ活発化したいなあと思ってたり。

具体的にはペイントとか、あと今回参加者の原稿を編集して、着衣メッシー良いなあって……R-15でギリ全年齢向けメッシー本とか作ってみるかなあ……。

まあいろいろ考えてますので、応援していただけたら幸いです。では、またの機会に



taramin
PixivID:1186456
twitter:@taraminmin1

こんにちは。このあとがきを考えるのに一番時間かかっています。内容はいつも通りのワンパターンですが、最近絵に多少なり動きを入れるようになっていて、それが出来ていれば幸いです。



ニコロ
PixivID:14814958
twitter:@niccolooffirenz

寒いですね。いや私の自宅が隙間風吹き荒れるダメ物件なだけかもしれないせんが。

というわけで、C99でも合同誌に参加させていただきました。世の中は色々あり過ぎますが、私個人の嗜好は相変わらずなので、未だにパイ投げ描いています。

ひとまず、私の「相変わらず」を発信できる機会を与えてくださったC99の関係者の方や、この合同誌の参加者の皆さん、そして、この本を手にとってくださった皆様には誠に感謝いたします。

この次も「相変わらず」が言えるよう、健康には気を付けていきたいです。皆様もお体ご自愛下さい。



アオマツ
Pixiv:1273030
twitter:@Aomatu_Spaghe

初寄稿。

肉体の曲線美、あらゆる見方の出来る表情、銀色光沢がもたらす魅力。

人間の肉体と銀色の顔料、有機的要素と無機的要素が合わさって生まれるのは自然に対するアンチテーゼか、人工と自然のフュージョンか、あるいは……。

そんなことを特に深く考えず思うがままに銀粉メッシー絵を描かせていただきました。

こんな感じの銀色な絵をTwitterやPixiv、Fantia、FANBOXなどで公開していますので、もし銀色に興味がありましたら是非。

WAM!

We fAvor More! Let And Messy!!



あるみむ
PixivID:14757465
twitter:@amylum18

今回が初参加のあみるむですわ！
オリキャラ漫画ですわ！
8ページのカラーがこんなにキツいと思わなかったですわ！
：よく考えたらコマの数だけ塗るキャラの人数が増えるんだから当たり前ですね
数えてみたら全部で54コマも刻んでやんの。
塗っても塗っても終わらないわけだ



かこい
PixivID:17397414
twitter:@kakoi_wam

かつてメッシーの合同誌を見て雲の上の存在だなあって思ってたんですけど、WAM絵を描き始めて2年、参加することができて本当に嬉しいです！皆様に負けじと普段はあまり描かない攻めた表現をしてみました。
いや、マッサージだからいつも通り健全ですね！とても！



しっとり
PixivID:24420142
twitterID:@MNST_yukkuri

初めましての方もそうでない方もこんにちわ。しっとりです。メッシー合同誌一作目、絵を描いてない頃から「自分でもし参加できたらな」と思ってた、この度参加させていただきました！
描き始めて、そして今日まで続けてきて良かったです。



くすら
twitter:CSR_1874T

初めましての方は初めまして。今回この合同誌に初参加させていただきます。
僕今衣装の花陽ちゃんはローションまみれにしたらとても良いだろうなとずっと思っていて、ようやくイラストとして形に出来ました。
小説も一緒に描いています。
花陽ちゃんはスクールアイドルなんだからバラエティ番組にも当然出ています。
色々粗があるかもしれないですが、楽しんでいただけたなら嬉しいです。また参加したいなア。

P.S.
くすらさんは人生で初めてパンチラを描いたらいいよ！やったね！

WAM!

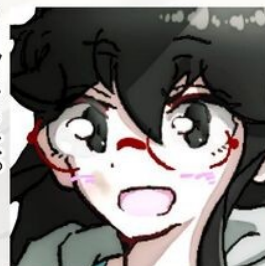
We fAvor More Wet And Easy!



ななしかき
PixivID:2696576
twitter:@isu66424484

皆様初めまして！
ななしかきです！
今年の合同誌は過去最多の
参加者ということで大変喜ば
しいです！
コロナ禍の外出自粛が絵の
スキルアップに地味に貢献
しましたが、同時に干潟へは
遊びに行き難くなってしま
いました：。
自由に干潟へ行くことができ
る日を心待ちにしています。

追記
小説汚染神シリーズお待ち
の皆様、大変お待たせして
ます。
2話ほど完成して
ます。
(頭の中で)。



ぬめりによん三世
PixivID:31010995
twitter:@numerinyon1212

こんにちは。
着衣メッシー大好きぬめり
によんです。
着衣メッシー好きの方には
勿論、全裸メッシー派の人
にも可愛いと思えるような
ほのわんぱく泥んこ絵を目
指しました。
健全着衣泥んこイラストの
良さが少しでも伝わってい
ただけ
たら幸いです。



はるま
PixivID:17558942
twitter:@messy_illust

通りもんとというお菓子
があるのですが美味しくあ
つという間に全部食べちゃ
うんですよ☆

ヤタみなみ
twitter:@yataminami

皆さんはじめまして。
ヤタみなみと申します。
いつもは東方の泥んこメイ
ンの着衣メッシー小説を書
いていたりしています。
今回はずっと読んでいたこ
のメッシー合同に参加する
ことができ、とても光栄に
思っています。
今回、東方の泥んこで話を
書くのは決めていたのだ
ですが、せっかくの初参加
ということで自身の登場キ
ャラ四人に挑戦してみました。
幻想郷の女の子たちが可
愛い服を着ているのを見
て、少しも着衣メッシーと
いうジャンルに興味を持
っていただけたらと思っ
ています。

WAM!W

We fAvor More!



山吹クライシス
PixivID:40619592
twitter:@Saturn_dosue

はじめまして、初参加の山吹クライシスです。
今回こちらの合同誌に参加させて頂くことができ、大変感謝しております！
今回は、大好きなデレマスの星輝子ちゃんの泥んこ絵を描かせて頂きました！
泥の質感や、コロコロ変わる輝子ちゃんの表情に拘りました。当初は輝子ちゃんのみで予定でしたが、描いている途中で仕掛人の幸子ちゃん和小梅ちゃんも泥の中に落とすようになったので、実質三人全員を泥んこ漫画にしてみました(笑)



Deviru
PixivID:73720796
twitter:@DeviruuuuuWAM

こんにちは！私は3歳であり、自由な時間に厄介な状況に陥る女の子を描くのが大好きです。
このような才能あふれる日本のMAMアーティストのコミュニティと一緒に仕事ができる光栄です。
皆様がこの漫画を楽しんで、楽しい一日を過ごせることを願っています。



ぬめろん
PixivID:39539615
twitter:@Ffmwj07ubauGCSb

初参加で原稿を落としてしまい、DL版のみの掲載となりました…。何やってるんだ私…。でもマンガは初挑戦で頑張ってみたのでよろしく願います！

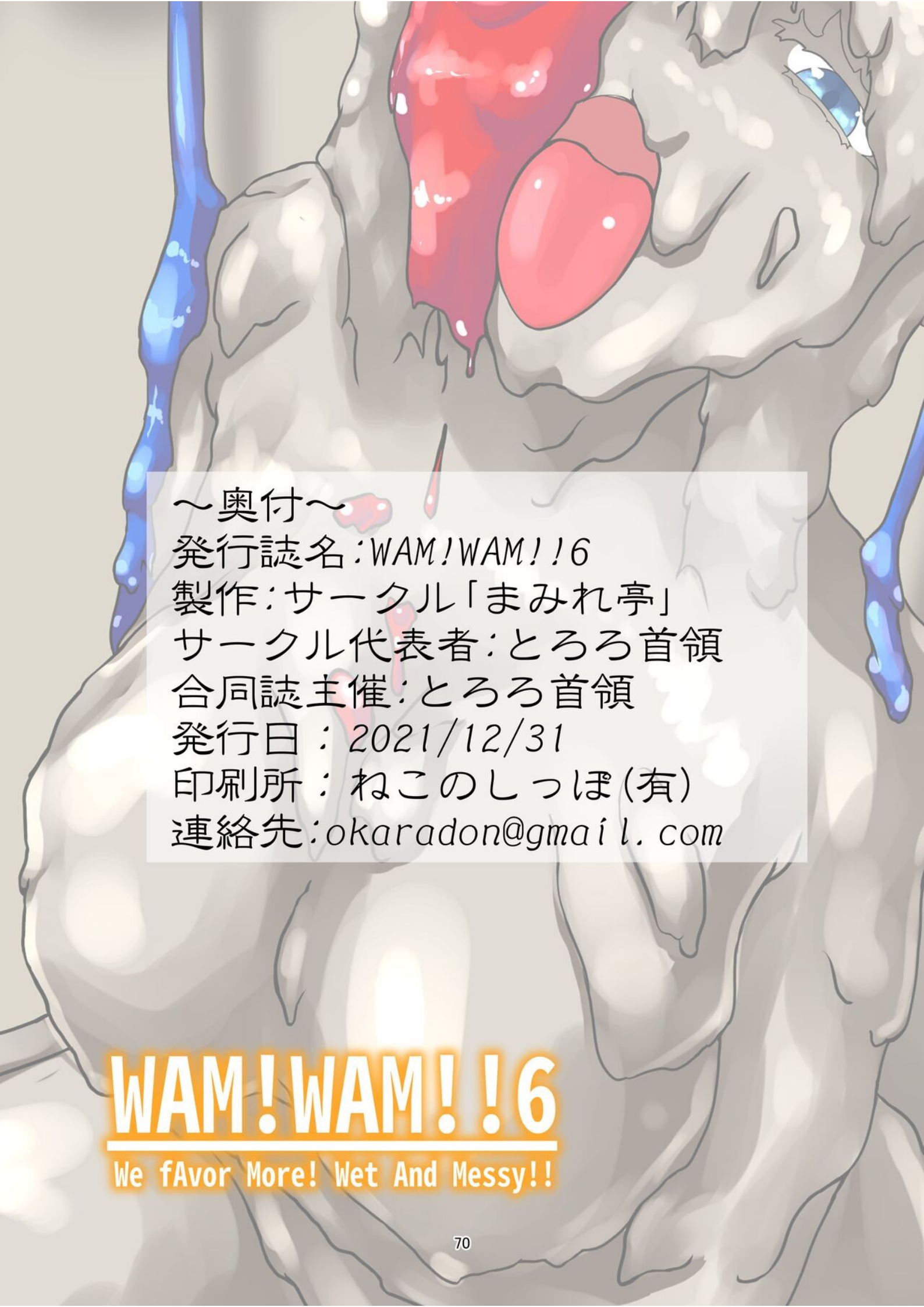


オエー鳥
PixivID:6027441
twitter:@sludge_oedori

コミケ初参加は寄稿でした。オエー鳥です。
2021年の3月から活動を始めて、こうして同人活動に参加できて、今まさに"楽しい"
といった気持ちでいっぱいです。
次回は絵や漫画にも挑戦したいなあ

WAM!WAM!

We fAvor More! Wet And Messy!



～奥付～

発行誌名：WAM!WAM!!6

製作：サークル「まみれ亭」

サークル代表者：とろろ首領

合同誌主催：とろろ首領

発行日：2021/12/31

印刷所：ねこのしっぽ(有)

連絡先：okaradon@gmail.com

WAM!WAM!!6

We fAvor More! Wet And Messy!!



WAM! WAM!! 6

We fAvor More! Wet And Messy!!